

啄木短歌論考

抒情の軌跡

太田 登



八木書店

太田 登

啄木短歌論考

抒情の軌跡



八木書店

著者略歴 おお た のぼる 太 田 登

1947年 奈良市に生まれる

1971年 天理大学文学部国文学国語学科卒業

1977年 立教大学大学院博士課程修了

現 在 天理大学文学部助教授

共編著 『奈良近代文学事典』(和泉書院)

『石川啄木集歌集篇』(和泉書院)

『漱石作品論集成』(桜楓社)

現住所 〒630 奈良市杉ケ中町 7

啄木短歌論考 抒情の軌跡

定価 4,000 円 (本体 3,884円)

平成 3 年 3 月 30 日 初版発行

著 者 太 田 登

発行者 八 木 壮 一

発行所 株式会社 八 木 書 店

東京都千代田区神田小川町 3 — 8

電 話 03—3291—2965

振 替 東 京 4 — 10457

印刷所 上 毛 印 刷

製本所 博 勝 堂

ISBN 4-8406-9080-4

中性紙使用

© 1991 N.OTA

啄木短歌論考

抒情の軌跡

目次

啄木という存在	「はたらけど」の歌をどう読むか	1
---------	-----------------	---

I 『二握の砂』にいたる抒情

野に叫ぶ抒情	「血に染めし」歌の成立	15
--------	-------------	----

メデューサの首	「石破集」の風景	33
---------	----------	----

歌へるは誰そ	「莫復問」の位置	63
--------	----------	----

自選歌の主題	『二握の砂』の原風景	83
--------	------------	----

II 『二握の砂』——視線の劇化

まなざしの歌集『二握の砂』		91
---------------	--	----

「穏かならぬ目付」の啄木		111
--------------	--	-----

幻想の森への回帰	明治四十一年秋の記念	141
----------	------------	-----

『二握の砂』の最終歌		161
------------	--	-----

Ⅲ 『悲しき玩具』——末期の歌の方法

末期の眼でうたう啄木

169

飛翔する林中の鳥

「閑古鳥」四首の世界

217

死地に挑む抒情

「目を閉じる」啄木

237

参考文献一覧

255

初出一覧

257

引用短歌索引

258

あとがき

272

啄木という存在

はたらけど

はたらけど猶^{なほ}わが生活^{くらし}樂^{らく}にならざり

ちつと手^てを見^みる

猪野謙二の大著『明治文学史』（昭60 講談社）の終章は、つぎのように締め括られている。

自然派、耽美派、「白樺」派等の人びとの真の意味での成熟期が暦年上の明治を越えて、おおむね大正期以後に属することはすでにその都度みてきた通りだが、啄木がわずか二十七歳の生涯をほとんど極端な、といつてよいほどの不遇のうちに閉じたのは、明治も末年の大正改元の三カ月まえであった。かれの晩年とその死は、明治という時代、あるいは明治の文学史の最後の一章を語るにもっともふさわしい一つの象徴的な事実として想起されるべきであろう。

猪野謙二は、啄木の短すぎた生涯それ自体が「日本近代文学全体に対する端的な批評」になり、「四十五年にわたる明治文学史の一帰結を象徴するもの」にもなっているのは、「あくまでも、啄木という存在が、である」と看破する。かかる猪野謙二の明晰な文学史観にきびしく位置づけられた啄木という存在について、「はたらけど」の歌をおして少しく考察をくわえてみたいと思う。

この「はたらけど」の歌については、すでに田中礼がその著『論攷石川啄木』（昭53・2 洋々社）でゆきとどいた分析をしているが、経済学者河上肇の『貧乏物語』（大6）で引用されて以来、この歌ほどくりかえし引き合いに出される啄木短歌はほかにあるまい。それはこの歌が読者の世代や境遇の相違によつて（あるいはその相違をこえて）、さまざまな読みかたを許してくれる不思議な魅力をもつことを明示している。と同時に、読みとりかたによつては啄木という存在そのものを危うくしかねない重みを、この一首は背負っているともいえよう。

篠弘の労作『近代短歌論争史・明治大正編』（昭51・10 角川書店）が綿密に跡づけているように、啄木没後十年の大正十二年に集中する、アララギ派の杉浦翠子と生活派の西村陽吉をめぐる啄木論議のそもその発端もまた、この「はたらけど」の歌にあつた。

「へちつと手を見る」なんといふ厭な余興でせう。初句から四句までは稚拙ながらも生一本のところに同情をもちますけれど、この結句に至つてのわざとらしい気取りには鼻もちがらないのであります。〔貧窮の歌〕

翠子の読みとりに従えば、「ぢつと手を見る」という結句は、「不遇の境遇」にもたれ、「不徹底な歩みを続けてゐた跡」を示す、実に緊張感の乏しい表現であつた。こうした翠子の啄木批判を頭からナンセンスときめつける反論が西村陽吉によつて投げかけられるが、論争そのものは、「短歌雜誌」の誌上討論「石川啄木の歌の可否を論ず」（大12・8）に明白なように、いかにもアララギ派の翠子受難のありさまを歌壇の内外に周知するために仕向けられたようなものであつた。たしかに啄木否定を強めれば強めるほど、「アララギ」における翠子は微妙な立場に追い込まれざるをえなかつた。いま、そのことに詳しく立ち入る余裕をもたぬが、いわば二重の敵とたたかいながら啄木論議にひた走る女流歌人翠子のエネルギーを近代短歌史のうえにとらえなおす必要はあろう。

ともあれ、翠子と陽吉とによつて巻きおこされた啄木論議そのものが、大正十年前後の歌壇を席捲するようになるアララギズムをめぐる熾烈な攻防に深くかかわつていたとすれば、近代短歌史のいわば分水嶺にしかと位置している「はたらけど」の一首の意味ははかりしれない。別言すれば、篠弘がいうように、「啄木をどのように認め、どのように拒否するかが、その批評者の体感しているそのときの問題を示し、さらに、その批評者のレベルをあらかじめものがたらせる、異質な存在である」ことを、さらにそのモメントがこの「はたらけど」の読みとりかたにかかわることをあらためてわれわれに実感させることにもなった。そして、数年後に中野重治があゝの有名な「啄木に関する断片」（『驢馬』大15・11）で、「彼の理想をして復活せしめよ。彼の相続をして石碑の建立の感傷性に終らしめるな」といわねばならなかつたように、啄木という存在のとらえかたのむずかしさもまさにここからはじまると

いえよう。かくして、「批評者のレベルをあからさまにものがたらせる」啄木という存在を、わたし自身の「はたらけど」の読みとりによって明らかにしなければならぬであろう。

この「はたらけど」の歌は、はたして翠子が批判するように緊張感の乏しい表現といえるのであろうか。たしかに「はたらけど」のくりかえしは緊密さにかけて安直な手法とみなされてもやむをえぬかもしれない。「猶わが生活楽にならざり」がたとえ貧しい勤労者の悲哀を率直にうたっているとはいえ、それはたんなる生活報告でしかないのかもしれない。だから結句「ちつと手を見る」は、いかにも芝居がかった「わざとらしい気取りには鼻もちがならない」とか、あるいは、斎藤茂吉のように、「啄木は全体として尊敬すべき歌人」だと認めながらも、名歌と秀歌とが必ずしも一致しない実例として、『ちつと手を見る』といふのが甘たらく、センチメンタル」だという否定も当然なのであろうか。おそらくかれらが「ちつと手を見る」という発想に堪えがたいセンチメンリズムを感じるのは、無批判に啄木短歌を持ちあげようとする生活派への反発がつよくはたらいていたからであろう。たとえば、北原白秋が「啄木の歌は一見無難なやうで、なかなか隙をみせぬところがある。兎に角一氣に貫いた精氣、また氣韻といふものがある。尋常の技巧ではない」として、表面にあらわれた技巧だけにこだわる翠子を一応たしなめたうえで、「啄木の歌といへば凡て階級意識の強い革命的のものと思つてゐる」、「啄木を日本短歌の一大革命家と盲拝するのも幼稚である」、と注意をうながしておかねばならなかったところにもそれは明白である。

ともかく、表現された啄木と向き合い、かくうたわねばならぬ啄木自体に迫ろうとしないかぎり、啄木という存在は見えてこない。すくなくとも、この「はたらけど」をめぐる啄木という抒情主体を真正面からとらえようとす

るならば、「ぢつと手を見る」にまつわりつく感傷性をたんなる詠嘆として軽く読みながすことはできない。

あえて逆説的ないいかたをすれば、啄木はまれに見る感傷家であつた。

茂吉のいう「甘たるく、センチメンタル」な詠嘆こそ、啄木短歌の魅力をゆるぎないものにする抒情の源泉であつた。いわばおのずから感傷的にならざるをえぬ、あるいは詠嘆せざるをえぬ抒情主体の内実こそ問題としなければならぬであらう。にもかかわらず、「短歌の形式は詠嘆の形式である」ということにこだわりすぎた茂吉にとって、「ぢつと手を見る」という抒情主体は感傷に溺れた弱き以外の何ものでもなかった。「莫復問」(「スバル」明42・5)六十九首をもつて歌をうたわざる空白の一年を経た啄木であつたとは、もとより知るよしもない茂吉であつた。だが、すくなくとも「ぢつと手を見る」と詠嘆せざるをえぬ精神というものは、茂吉には見えていなかったといえよう。

では何が茂吉をそうさせたのか。それは広く愛誦される啄木短歌の魅力がその感傷性にもとづいていることを誰よりもよく知っていたからにほかならない。あるいは別のいいかたをすれば、「短歌を唯一の表現形式とし、そこに自己の制作活動の一切をかけねばならなかった茂吉」(国崎望久太郎)にとつては、啄木(亜流)の感傷や詠嘆を認めることは短歌(おのれ自身)そのものの存在を否定することを意味していた。だからこそ、「はたらけど」の歌などはいわゆる通俗歌の典型として、そのセンチメンリズムをたたいておかねばならなかった。

茂吉の短歌観の形成史に詳しい本林勝夫は、『斎藤茂吉の研究―その生と表現―』(平2・5 桜楓社)のなかで、いわゆる滅亡論を機縁としてかれは短歌という詩形式の限界を認識することになるが、歌人としての主体性においては、それは限界というよりも、むしろ「限定への意志」とでもいうべき性質のものであつた、と明快に分析して

いる。かかる茂吉の短歌観からすれば、「ぢつと手を見る」という措辞に見え隠れする、詠嘆せざるをえぬ抒情主体というものは見えていなかった、というよりはむしろ見てはならぬものであったというべきであらうか。

それにしても白秋や茂吉の投げかけた批判は、かく表現せねばならぬ啄木という抒情主体に迫ろうとするうえで見のがすことのできぬ問題をふくんでいる。のみならず、近代短歌史の展開に興味をもつ者にとって、ゆるがせにできぬ課題でもそれらはあった。すでに国崎望久太郎が『増訂啄木論序説』（昭41・1 法律文化社）で言及するように、啄木からアララギへの継承のありかたを、さらには「啄木の歌論は、生活派とアララギ派とに分離曲折して行く近代短歌の歴史的位相において、それぞれの歌論的契機を内包していた」ことを、われわれはより明らかにしてゆかねばならないであらう。

しかしながら、こうした近代短歌の歴史的位相に立てば、プチ・ブルジョア対プロレタリアという階級意識の観点にとらわれすぎた陽吉たちの生活派もまた、詠嘆せざるをえぬ精神というものを十分に理解することができなかったといえる。あえて性急にいえば、陽吉たちの唱える労働者短歌、生活派短歌の源流として、この歌を位置づけるのはあまりにも画一的なとらえかたではないだろうか（新日本出版社刊行の『日本プロレタリア文学集40プロレタリア短歌・俳句・川柳集』がこの「はたらけど」の歌を巻頭に置いているのも、そうしたひとつの証左となろうか）。すでに明らかなごとく、手ばなしで啄木を持ちあげるだけでは、詠嘆せざるをえぬ啄木という抒情主体をまともにとらえることはできない。田中礼もいうように、「啄木の感傷の底には、明らかに、人生の体験・人間の心の深部にふれる何ものかがある」とすれば、いわゆる革命的思想家としての積極的啄木像におさえつけられそうな「弱者」の姿をこの歌の背後にはつきりと読みとるべきではないだろうか。

『一握の砂』という第一歌集の刊行に際して、「広く読者を中年の人々に求む」と啄木は願う。そのことはよく知られているが、そう願わずにはおられなかった真意とは。それは、かならずしも働く人々の生活感情を代弁することだけではなく、「ぢつと手を見る」と詠嘆せざるをえぬおのれ自身の内なる心の働きを見据えておきたかったからにほかならない。たしかに、一人の生活者としても家長としてもまさにやるかたない無力感をじつとかみしめる弱々しい姿がうかがあがる。しかし、われわれがここにかれの弱々しい姿を認めるならば、それがただならぬ弱さであることもわきまえておかねばなるまい。「はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり」という微動だにしない現実をまえにして、おのれの弱さを弱さとしてあるがままにじつと見据える啄木の冷徹なまなざしがここにはある。つねに「葛藤を求むる人」「自己の誠実を貫き生きねばならなかった」（国崎望久太郎）啄木にとって、「ぢつと手を見る」は、おのれの弱い心を凝視するひとつのたしかな認識の方法でもあった。

ここで啄木晩年のよき理解者でもあった若山牧水のこの歌にたいする鑑賞に耳を傾けておきたい。

この一首にしても、ただ漫然と概念的に貧しいとか苦しいとかいふことを考へてゐるのではなく、しみじみとそれを感じ味はひ、それにたいするおさへがたい自分の衷情を述べてゐるのである。

……この一首のそれと異つてむしろ気味の悪いくらゐの沈痛な印象を読者にあたへるのは、主として、結句の、ぢつと手を見る、といふ一句にあるかと思ふ。

……見るともなく自分のやつれはてた手に眼がそそいだといふところに、何の理屈も説明もないおそろしい力があるのである。

（『啄木歌集』の歌）『和歌講話』大6・2所収）

まことにすぐれた鑑賞だと思う。牧水が「気味の悪いくらゐの沈痛な印象」、「何の理屈も説明もないおそろしい力」を「ぢつと手を見る」という一句に読みとつたのは、そこに「其身動く能はずして、其心早く一切の束縛より放たれたる著者の痛苦の声」（歌集広告文より）を聞きとることができたからであろう。かかる牧水の鑑賞をふまえながら窪川鶴次郎もまたつぎのように指摘する。

……啄木はこの歌を、たんに現実の生活の問題としてよりも、むしろそういう生活をしている自分自身を歌おうとしたのであろう。そこに「ぢつと手を見る」というこころの動きがとらえられたのだと思う。この一句によつて、ありふれた事がらが生き生きとうつたえる力をあたえられている。（近代文学鑑賞講座8『石川啄木』

昭35・4 角川書店）

たとえ不如意な現実であろうとも、自己の生きかたへの省察をおこたらぬかれの痛苦の声は、ここによろやく啄木の求むる読者に伝えられることになったといえよう。かくてわれわれ啄木短歌の読者もまた、かれのただならぬ弱さというものがいわば詠嘆せざるをえぬ抒情主体によつて、たえず守護され、鼓舞されているということを見極めることになる。

ところで、かかるただならぬ弱さというものが意外にも啄木自身のしたたかな生活意識によつて厚く裏うちされ

ていた、ということはどのように考えればよいのであろうか。

かつての啄木はつぎのようにうたったことがある。

快きあはれこの疲れ息もつかず仕事をしたる後のこの疲れ (『スバル』明42・5)

心よく我に働く仕事あれそれを仕遂げて死なむと思ふ (『東京朝日新聞』明43・3・28)

朝日新聞社の校正係として煙草ものめぬ忙しさがつづくなかで、かれはひたすらに生きがいのある「仕事」を求めようとする。妻の家出以来、真面目な勤労者として生活の改善に没頭する。いわば生活者啄木であった。ところが、「身心両面の生活の統一と徹底」とをモットーとする「最も確実なブラクチカルフィロソフィーの学徒になるところだった」啄木は、「我等の人生は、今日既に最早到底統一することの出来ない程複雑な、支離滅裂なものになつてゐる」という発見を、四十三年三月に函館の友宮崎大四郎に書き送ることになる。当時の借金メモによれば千三百七十二円五十銭という借金をかかえた経済生活(ちなみに校正係としての月給二十五円、豆腐一丁一銭の時代であった)のなかで、「読書を廃し、交友に背き、朝から晩まで目をつぶつたやうな心持でせつせと働いてゐた」啄木であった。

このような生活動向にあつて、死んでも悔いない「仕事」とは何を意味するのか。そのことを「暮しかた」「生きたか」という観点から考えてみよう。

朝から深夜まで懸命に働かねばならぬ「暮しかた」のなかで、啄木が求めようとする「仕事」とは、かれ自身の

「生きたかた」の問題であつた。「生活の形式と性質は労働者と完たく同じ」立場に身を置きながら、検事のような冷やかな眼で「運命」の面を熟視する啄木でもあつた。おのれの求める「生きたかた」はいまの「暮しかた」を逃れてえられるものではない。死ぬまで「暮しかた」という重荷をひきずつて歩かねばならぬ。「生活」に適合できぬ人生の落伍者であることを、「創作的生活」の敗北者であることもみずから認めねばならぬ啄木であつた。かかる「啄木の歌は、文学を忘れて暮らす以外ない詩人の溜息に他ならなかつた」（今井泰子）といわれるなかで、みずからの「生きたかた」をとらえなおすべき「仕事」を求める啄木。

たしかに啄木はいう。

「今度出す（出し得れば）歌集の名も『仕事の後』^{しごとのおち}といふ名をつけるつもりだ。仕事の後！ それで可いぢやないか。つまり有つても無くつても可いといふわけだ。さうして一切の文学の価値と意義とは其処にあると僕は思ふ」。

この宮崎にたいする告白は、「有つても無くつても可い」ところに「一切の文学の価値と意義」を見出そうとする啄木の「生きたかた」を表明するものであつた。「暮しかた」と「生きたかた」の相剋に啄木が身を横たえながら求めた「仕事」は、いまやあつてもなくともよいものからしなくてはならないことの本来の意味をもつようになった。

なぜならば、この「はたらけど」の初出（東京朝日新聞）明43・8・4）がそのことを明瞭に物語っている。

耳搔^みけ^かばいと心地^{こころ}よし耳^{みみ}を搔^かくクロポトキンの書^ふを讀^よみつゝ
何^{なん}すれば此^こ処^こに我^{われ}ありや時^{とき}に斯^かく打^{うち}驚^{おどろ}きて室^むを眺^{なが}むる

とある日^ひに酒^{さけ}を飲^のみたくてならぬ如^{ごと}く今日^{けふ}我^{われ}切^きに金^{かね}を欲^ほせり

おほ
大いなる水晶の玉を一つ欲しそれに対ひて物を思はむ

かかる「手帳の中より」五首中の冒頭歌がこの「はたらけど」の歌であった。

岩城之徳、碓田のぼる、清水卯之助、宮守計の諸家がすでに指摘するように、大逆事件発覚後の啄木がクロボトキンの思想的影響をうけはじめる時期にこれらの歌は深くかわっている。この「はたらけど」の歌を大逆事件への認識の過程に位置づけることは、深読みのそしりをまぬがれたいが、「暮しかた」という重荷を放擲できぬ「生きた」への意志は、社会変革なくしてはとうてい実現されようもなかったことも事実であった。たえざる自己変革への意志が社会変革へのそれとつながる「生きた」を、「ぢつと手を見る」の「手」が見据えている。見える「手」は、見えにくい「生きた」のあるべき方向をはつきりとうつしだす人間的良心の鏡であり、「わが生活」の内と外とをきびしく統御する生活意識のみなもとでもあった。

猪野謙二のいうように、啄木という「存在」が日本近代文学全体にたいする端的な「批評」たりうるとするならば、つぎのような啄木であったことを忘れてはなるまい。

- (1) 「文学といふ人間活動の一つの形式それ自身には、本来何の価値も権威もあるべきでない」と断言する啄木であった。
- (2) 「朝から晩まで働きづめに働いて、そしてバタリと死にたいものだ」と願いつつも、「抑へようとしても抑へき